選外佳作の四

雪のトンネル

桂本美枝子

雪のたくさん降る北國の田舍のお話です。曉美(あけみ)さんや惠子(えい)ちやんのおうちも、お山も田圃もすつかり雪をかぶつてしまひました。

お晝御飯をごちさうきました惠子ちやんはスキー帽をかぶつて小さな赤い手袋をはめると、長靴をはいて、小さなバンバコ(雪掻き)を持つて外へ飛び出してきました。そして綿の樣にふは〳〵した輕い雪をバンバコでサブツサブツと眞四角に切つてお豆腐の樣にすると、そのお豆腐をバンバコにのせて、一ところへ積み始めました。そしてバン〳〵と固く叩きつけてるますの。

積んではバン〳〵、積んではバン〳〵、その音は眞白な野原の向ふのお山の上にまで響いていつたのです。

恵子ちやんは遂々、雪のお山を造り上げましたよ。お山には椿の葉や梅の小枝を差し込んで木が生えてゐるのにしましたの。すると

今度はお山のおなか(腹)の處をまん丸に穴をあけました。そして、ソォーッとお山が崩れない樣に、向ふ側まで穴をあけてトンネルを造りました。するとおうちからこの間お父さんに買つて貰つた汽車を出してきて、トンネルの中をくゞらせますの、汽車についてゐる長い紐をトンネルの中へグウーッと入れると、向ふ側に廻つて、

「皆さん、トンネルですからお窓をしめて下さい、ポー、ゴッコチッチ、ポッポシュッシュッ」と元氣よく言つて面白さうに幾度も〳〵、トンネルをくゞらせて遊んでゐました。すると、

「恵子ちやん、橇しないかい」

勢よく橇を曳きづゝて走つて來たのはお隣の曉美さんです。

「えゝ、致しませう」

「恵子ちやん、僕にも乘せて吳れないと嫌だよ」

「いゝとも」

さう言つて恵子ちやんは橇の上にきちんとお坐りして、二つのお手々で前の方にしつかりつかまりました。曉美さんは、

「いくよ、ボー」

後向(うしろむ)きになつて、うーん　うーんと曳つぱりました。二三回、ズルッ　ズルッと滑つたかと思ひますと、曉美さんは

「もうこれでいゝだらう。さあ今度は僕の番だよ」

さう言つて橇に乘つてしまひました。

恵子ちやんは、仕方御座居ません

「曉美さんたらこすいわ」

さう言ひ乍ら今度は恵子ちやんが曉美さんの樣にして力一杯曳つぱつてみました。けれども、少しも動きません。

「おい、早く行き給へよ」

「でも動かないんだわ」

「なんだ、つまらないなー」

曉美さんは、ぶつ〳〵言ひ乍ら降りてしまひました。

「恵子ちやん、お山へ行かうよ、山だつたら曳つぱらなくても二人とも一しよに滑れるよ」。

「あゝそれがいゝわ、行きませう」

二人は橇を曳きづつて惠子ちやんのおうちのすぐ横の道から登りかけました。大分登つたと思ふ頃、惠子ちやんは少し疲れてきました。

「曉美さん、少しお休みしない？」

「何だ、弱蟲だなー」

でも二人は橇に腰をかけてお休みしました。見渡す限り一面の銀世界です。そして時々お日樣が雲の中から、ひよこりお顔をおだしになりますので、急にぎら〳〵つとまばゆくなります。あたりは物凄い程の靜けさです、奥山の方で山鳥がばた〳〵つとしたかと思ふと又すぐに元の樣に靜まりかへつてしまひます。

お休みした惠子ちやんは元氣一杯になつて今度は先にたつて、とつとこ〳〵登つて行きました。少しばかり登つたかと思ふとごうでせう。びつくりしましたよ、惠子ちやんの眼の前には素晴しい雪のトンネルが奥深く通じてゐるではありませんか、

「曉美さん　雪のトンネルが！」

「えつ、あれ、本當に！　やあ！」

「だから僕が山へ行かうつて言つたんだよ」

さう言ふと曉美さんはトンネルの中へ、ぐん〳〵入つて行きました。

「いやだわ　こわいわ　狐か狸の洞穴かも知れないわ、曉美さーん」……。

一方奥の方へ入つて行つた曉美さんは、びつくりしました。すぐそこには小さな汽車が、眞黑な煙を吐いてシュッ〳〵〳〵こいつてゐるではありませんか、

「やーい、惠子ちやん！　汽車が！」

「えゝつ」

惠子ちやんはびつくりしてトンネルの中へこび込みました。するこ本當の汽車が煙を吐いてシュッシュッ〳〵〳〵こ待つてゐるのです。曉美さんはもうこつくに汽車に乘つてしまつて窓をあけて、

「惠子ちやん〳〵此處だよ〳〵」

こ手招きをしてゐるのです。惠子ちやんも夢中でそれに乘つたのです。するこごうでせう。ポーこ汽笛が鳴つたかこ思ふこシュー、シューこ二回程大きく湯氣を吐きました。途端にゴォッ、ゴォッ、ゴォッ、ゴォッ　ゴッ　ゴッ　ゴッ　ゴッ〳〵〳〵〳〵汽車は動き出したのです。二人は汽車の中を走り廻つたり、窓をのぞいたり、深いクッションに身をうづめたり、小躍りしてゐました。そのうちに汽車はもう止まつてゐたのです。二人は飛び降りました。

するこあたりにはもう雪なんか少しもないのです、見渡す限り綠の芝生が續いてゐる許りな

のです、それからこても暖かいのです。向ふの山には淡い霞がかゝつてゐます。そしてその廣い綠の野原の眞中には美しい小川がさら〳〵流れてゐるのです。兩岸には土筆の兵隊さんが、づらーつと竝んでゐます。その中に交つて可愛いゝ菫のお孃さんがまゝごと遊びをしてゐらつしやいます。そしてその他の色々の美しい花も咲き揃つてゐます。櫻の花も土手に沿ふて咲き亂れてゐました。空にはさつきから雲雀がピーヒヨロヒヨロ　ピーヒヨロヒヨロ囀つてゐます。二人は餘りの美しさにみこれてゐますこ、向ふの花の中から二匹の小馬がパカパカ〳〵〳〵やつて來ました。やがて二人の前までやつてきますこ、

「冬の國のお坊つちやん、お孃ちやん、さあ〳〵早く私達にお乘りなさい、これから春の國を御案內致しませう。

こいつてくゐりこ向きかへりました、二人は大喜びにおんまにひよいこ跨りました。

おんまは土手の上を輕く歩き始めました。歩く度に轡につけた鈴がシャンシャン〳〵〳〵このごかな春の空氣を動かして行きます、小川の中にはメダカさんもスーッスーッこ泳いでゐます、そのうちにおんまがこまりました。其處にはお髯を生やしたにこ〳〵顏のおぢちやんが何か大きな袋にもたれて暖かい光を身一杯に浴びながらうつら〳〵こしてゐます。おんまの來た音に眼を覺ますこ

「おや〳〵これは〳〵、冬の國の坊ちやんこお孃ちやんですかい、よくきておくれた、此處は春のお國だよ、おぢいさんは春の國のおぢさんなんだよ、そうらそこにブランコもあるし、お滑り臺もあるし、自動車もあるしおんまもあるし何でもしてゆつくりお遊び」

「おぢちやん、おぢちやんは春の國のおぢちやんかい、春の國つて何時でもこんなに暖かいのかい」

「あゝさうだよ　いつでもこんなにのんびりしてゐるんだよ」

「おぢちやん　春の國つていゝのね　おぢちやん、おぢちやんの、もたれてゐるそれはなーに」

惠子ちやんはおぢちやんがさつきから大事さうにしてゐる大きな袋が氣になつて堪りませんのでたづねてみました。

「アハ……これですかい、これは霞の袋こ言ふんだよ、おぢちやんがね、この袋の中から少しばかりの霞を出すこすぐにこんなにのどかな春になるんだよ、

「まあ、霞の袋つて言ふの、いゝわね」

「おぢちやん、そんなにいゝ霞だつたら僕達に少し呉れないかい」

「アハ……こんなもの持つて歸つてどうするんだね」

「おぢちやん、僕達のこころも早くこんなに暖かい春の國にするんだよ」

「おゝ　そーかい、それでもね　坊ちやん、この袋は何時(なんぢき)でもあけてはいけないんだよ！。そーら　あの空におてんさまがいらつしやるでせう　あのおてんさまがね、あけてもいゝよつて仰有るまではあけちやいけないんですよ」。

「なあーんだ　つまらないなー」

「おぢちやん、私達のこころへも來るの！」

「あゝいきますとも　いきますとも　もうすぐいきますよ」

「おぢちやん、私達のこころへ來る時何に乘つてくるの」

「あゝ〳〵孃ちやん孃ちやん達の處へ行く時ですかい、これから汽車に乘つてね、それから雪のトンネルをくゞつて、それからお山を降りてゆくんだよ」

「あゝ嬉しい　もう幾つねるこ來るの」

「そーだね　もう二十程ねたら行くよ」

「おぢちやん　も二十ねたら來るの　僕達お山までお迎ひに來てあげるよ」

「あーあー　ありがたう　そう〳〵　もう大分夕方になつてきたね、お歸りにしませう、さつきのお馬に乘つてね」

春の國のおぢちやんはこう言ふこ又うつら〳〵眠り始めました、二人はおぢちやんに左樣な

らをしておんまに乘りました、そしてさつきの汽車のこころまでくるこ驚きましたよ。もう汽車も雪のトンネルもありませんでした。二人は

「まあつ」。

「おやつ」。

こ言つて可愛いお目目をくるくしして驚きました、あたりはやつぱりもこの樣に一面の眞白な銀世界です、二人はおうちへ急いで歸るこお父さやお母さんに今日あつたお話を致しました。

それでも惠子ちやんこ曉美さんはそれから二十おねんねして、あの春の國のおぢちやんをお山までお迎へにゆくのを待つてゐましたこ。